

第 37 回公立小中学校栄養教諭・学校栄養職員研究大会実施報告



平成 28 年 10 月 21 日（金）、第 37 回公立小中学校栄養教諭・学校栄養職員研究大会が、大会主題を『深めよう 心と体を育む食教育』～個別対応の在り方の研究を通して～として、エスポワール愛媛文教会館にて開催されました。栄養教諭・学校栄養職員だけでなく、教育委員会関係者や給食センター職員、養護教諭の先生方の参加も得て、101 名が真剣に研究協議に取り組み、指導講話や講演に聞き入りました。



1 研究発表および協議

「宇和島市と連携した食育の取組」

発表者 宇和島市立蔭淵小学校 学校栄養職員 山崎 美沙先生
宇和島市立吉田小学校 栄養教諭 濱瀬そよみ先生

宇和島市栄養教員部は、平成 25 年 3 月に策定された宇和島市食育プラン（第 2 次）のライフステージに応じた食育の取組の中で、学童・思春期のステージについて宇和島市と連携し、「宇和島市学校給食地産地消推進事業、食育連絡会、小児生活習慣病予防事業」についての発表でした。

宇和島市学校給食地産地消推進事業では、「えひめ水産の日」「地産地消の日」「食育の日」に、宇和島産の鯛やあこや貝柱などの食材を活用して、多種多様な料理を導入しています。全国学校給食週間中には、宇和島市全小中学校に「鯛の照り焼き給食」を提供し、水産業教育と将来を見据えた魚食普及をすることで、郷土に興味・関心を持つことができるよい機会となっています。



食育連絡会では、保険健康課を中心とした食育関連部門の担当者が定期的に会議を開催し、食をめぐる現状と課題を基に、市民に対してより効果的かつ効率的な食育の推進を図っています。宇和島産業まつりの食育パネル展への協力、朝食摂取啓発において「洋食・和食おすすめメニュー」レシピのチラシ配布、ヘルシーメニューコンテスト、元氣うわじまサポートバンクなど、食育のサポート体制が整っています。

小児生活習慣病予防では、小学生 4 年生を対象にした指導媒体を作成して、どの学校でも共通の内容で指導を行っています。個別相談では、指導内容や資料を市内で統一することにより、均一化した指導の手立てがとられています。夏休み中に「健康

づくりノート」を活用して、毎日体重測定をしたり、「30 秒かむ。洗濯たたみのお手伝いをする。アイスを氷菓にする。」など自分自身で目標を設定したりして、生活習慣に気を付けることにより、体重改善などの効果につながっています。

行政との連携を強化しながら、児童生徒に新鮮で安全安心な地元食材を学校給食に取り入れ、日々の食体験を重ねていくことで、食への感謝の気持ちや郷土・宇和島を愛する心を持ち、健康で心豊かに生きる児童生徒を育てていきたいという熱い情熱を感じました。イベントで終わることなく、日々の実践につなげていることに感服しました。

2 指導講話 「学校給食の現状と課題」

講師 愛媛県教育委員会保健体育課 指導主事 越智 美保 先生

(1) 危機管理に関すること

想定以上の災害(事故)が起こる可能性を常に意識して「想定外を想定内」にできるように、小さなことを見落とさない視点で対応することが大切である。平成27年度の全国学校給食における食中毒は2件、平成28年度は現在までに1件。ヒスタミン食中毒やノロウィルス感染などを防止するために、調理場だけでなく受配校や教室での衛生管理の徹底、納入業者及び食品の選定などに十分留意する必要がある。

異物混入については、「学校給食衛生管理基準」に照らし合わせ、事例に学び適切な対応策を講じておかなければならない。

食物アレルギーに関しては、他の児童生徒と同じように学校給食を楽しめるアレルギー対応食の提供が望まれる。平成27年度に県内で起こったアレルギー事故は、新規発症(キウイ・えび・いかなど)が多く、調理時の混入や児童生徒による誤食などが原因であった。正しい判断に基づき、命に関わることなので安全を優先させた適切な対応が求められる。

(2) 栄養管理について

学校給食実施基準は、全国的な平均値を示したものであるため、各校の平均や傾向を把握し、提供する量を策定して配膳し、残量調査などで評価する。日本人の身長・体重の分布曲線を活用し、個々の児童生徒の健康状態や生活活動、地域の実情に適応した適用をする必要がある。

(3) 食に関する指導について

食に関する指導は、学校教育全体を通じて全教職員が指導していくことが大切である。日々の学校給食は、食に関する指導の土台となり、生きた教材として活用できる献立作成の充実を図る必要がある。



3 講演 「成長期の食こそ本人及び次世代の健康を決める！」

講師 早稲田大学 総合研究機構研究院教授 福岡 秀興 先生



ポスト福祉国家では、セルフケアと生涯ライフステージにおける母子保健が重要性で、その為には、一生を通じた栄養教育が必要であること。思春期ダイエットの危険性を、骨密度や低エストロゲン血症など身体・生理機能、無気力など精神・心理面に影響を与えるということを、多くのデータを基に教えていただきました。自分だけでなく次世代、三世代にも影響するということが驚きました。「Will not eat, can not eat! 食べないようにしていると、食べられなくなる」という問題があるように、学校教育において栄養教育が徹底して行われるべきで、思春期からの望ましい生活習慣づくりが大切です。

「学校給食での児童生徒に対する栄養教育が、将来に影響を与え、日本の将来をも決定する。今しかない！」という言葉が心に残っています。第一線で活躍されている福岡先生の、ソフトな語り口の中にも幅広く深い臨床知識と経験に基づいた貴重な講演でした。多くのことを学び、職務の責任と重要性を強く感じました。(詳細は研究集録に掲載)

4 参加者の感想より

研究協議(実践発表)について

- 市と連携した事業の発表は、市教委や保健所の方の参加があると、今後の連携が取りやすくなると思った。

講演(成長期こそ本人及び次世代の健康を決める!)について

- 学校給食と食育の大切さを改めて実感し、もっと頑張らねばと思った。

研究大会全体について

- 栄養教員部となって一年目に今回のテーマは、これからの取り組んでいくべき指針のような内容でとてもよかった。